

第三回留学報告書

河野遥希

2022年6月30日

MITの経済学部 Ph.D. プログラムに所属しております、河野遥希です。2022年の前半の活動についてご報告いたします。

1 講義

経済学部の Ph.D. プログラムでは、最初の2年間は授業が中心です。この春学期は、全部で5つの授業を履修しましたが、印象的だったものを2つご紹介します。

まず、一番大変だったのは、ゲーム理論の授業 (14.126) でした。これは、ゲーム理論の各分野について、古典的なトピックから最近の研究の方向性までを一気に概観する授業で、内容をきちんと理解しながらフォローするのが非常に大変でした。特に、毎週出る宿題では、一つの問題を解くのに技術的な論文を (時には appendix まで) 複数真面目に読む必要がありました。締切間際の毎週金曜日には、日付が変わるまでクラスメイトと議論しながら問題と格闘しましたが、それでもよく分からない (というか、そもそも設定に無理がある) 問題も多く、みんなで愚痴を言い合っていました。

その一方で、計量経済学のトピックコース (14.386) は、課題の量という意味では軽い授業で、学期末に30分程度の論文紹介をすることが、単位取得の必要十分条件でした。扱われた内容はどれも興味深く、また、自分の関心に合わせて色々寄り道をしながら、周辺分野の研究を探索できた点で、大変有意義でした。学期末のプレゼンでは、Debiased Machine Learning と呼ばれる、機械学習の手法を計量経済学の諸問題に応用するための理論についての論文を発表しました。

2 研究

アメリカに来てから初めてランチセミナーで自分の研究を発表しました。行動経済学ではデフォルト効果という現象が経験的に知られています。これは、選択肢の中にデフォルトで選択されていたり、推奨されていたりするものがあると、その選択肢を選びがちになるという事実です。例えば、カフェに行くとき、あまり何も考えずに、デフォルトのサイズであるトールサイズを注文する人が多いと思います。これまで、デフォルト効果がどのような状況下で、どれぐらいの強さで発揮されるかを、実証的・実験的に調べる研究が多くなってきましたが、この現象がどのようにして起

きるのかを理論的に説明しようと試みたものはあまりありません。今回の発表では、商品の売り手が消費者に向けて選択肢を提示する状況において、デフォルトの選択肢が売り手から買い手へ何らかの情報を伝達していると考えて、ゲーム理論的なアプローチを用いて、デフォルト効果の理論的な説明を試みました。実は、もともと今学期のセミナー発表の予定はなかったのですが、色々あって急遽発表することになり、発表前の1週間ほどで構想から理論的な解析までを突貫工事で進めました。その割には、まずまずの内容を発表できたかなと思います。まだまだやらなければならないことだらけですが、うまいこと進めていけたらと思います。

また、新しい情報量規準を提案した修士論文は、雑誌に投稿してから1年以上経過していますが、未だに査読中です。この前2回目の改訂を行い、再度投稿しました。査読者のコメントもかなり好意的だったので、次の報告書では流石に良い報告ができると思います。

3 最後に

最後になりましたが、日頃からの多大なサポートをいただいている船井情報科学振興財団の皆様、厚く御礼申し上げます。そろそろ、心の底から重要だと思える研究テーマを見つけ、具体的な成果を出していけるように、2年目以降も精進して参ります。